

ガーリー著 『インドの服装』

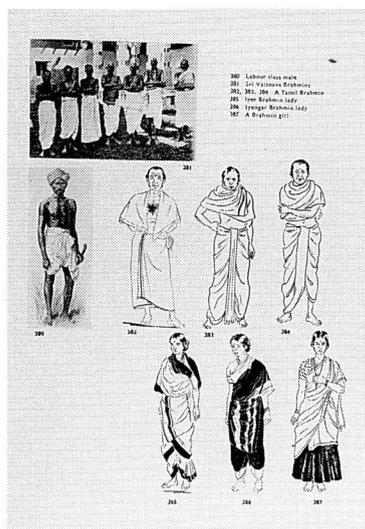
Ghurye, Govind Sadashiv. *Indian costume*. 2nd ed. New York, Humanities Press, (1951) 1967. 302p. plates 25.3×18.5cm 383.125-G (文献番号10-32)

著者ガーリーは、ボンベイ大学名誉教授で、国際的に著名な社会学者である。梵語、インド学、人類学及び歴史学に精通し、広範な主題に関して社会学の立場から論じた多数の著作があり、それらはすべて、深い学識と個々の現象に対する細心の洞察と実証的な研究に基づいたものである。また、彼は自らの優れた研究業績に加えて、インドにおける多くの有能な社会学者の育成についても指導的な役割を果たし、インド社会学の分野に大きく貢献した。

本書は、インドにおける古代から現代までの服装の変遷に対し、社会学的分析を試みたものである。インドは、ソ連を除く全ヨーロッパの面積とほぼ等しい広大な領土に、言語の異なる多くの民族が散在し、各々独自の文化・風俗を擁して社会を形成し、複雑な様相を呈している。こうしたインドの民族的多様性をその歴史的背景と対照させながら、服装史の中で解明している。ガーリーは、社会学、民族学はもとより、更に広い学問領域に占める服装学の意義を高く評価し、本書もまた、インドで軽視されてきた服装社会学の空白を埋めるべく企図されたもので、その目的は十分達成されているといえよう。

第1章の序論と第2章の歴史的背景の中で、インドと西欧の服装の違いと幾多の民族の侵入、興亡を経てきた複雑なインド史に言及し、服装を人間性の尺度として哲学にまで高めた西洋の服装観と、インド国民の生活をすみずみまで支配し、インド社会の特殊性の要因を形成してきたヒンドゥー教などの宗教の影響で、服装を二義的なものとみなしてきたこれまでのインドの服装観との相違が興味深く指摘されている。また、これが西洋の古典とインドの古典からの豊富な引用と相まって、一種の比較文化論ともなっている。第3章以下第10章までは、巻頭にまとめられた412図に及ぶ写真と対照しながら、インドの服装を紀元前320年以前から1950年までについて詳述し、地域別、人種別、階層別に極めて実証的な解説がなされている。

本書により、古代ギリシア、エジプト、西アジアの服飾と密接につながるインドの服装が、その宗教、社会、地理、気候などの影響下に独自の発展をとげた経過を通観することができる一方、服装がいかに時代や社会の反映であるかを知ることができる。



司祭、僧侶など、インド最高位のカーストつまりバラモン（ブラーモンまたはブラーミン）に属する人々の衣装